

## 第5章 あしあと～在職当時をふりかえって～

### 石の上にも5年間

昭和49～昭和53年度下水道課長 住松 寛

昭和49年3月27日午前7時頃、私は二日酔いの頭でまだ春眠の中にまどろんでいた。新年度の移動発令は一両日中と思われたが、魚津土木事務所長になってまだ1年の私は、先ず対象外だろうと、昨夜は2、3の所員といささか飲み過ぎていたのだ。突然、家の者が、大西さんから電話だと起こしにきた。大西さんといえば、時の土木部長以外知った人はいない。どうせ何かお小言だろうと、憂うつな気分を受話器をとると、例の明るい調子で、「君を下水道課長にしたからな」とおっしゃる。「えっ、下水道課長ですか」と、驚きのあまり思わず声に出した。

何しろ県庁に下水道課はまだなかったし、新設の情報も知らぬ私には、全く寝耳に水だったのだ。その日の日記に、「有難迷惑、魚津土木にいたかった」と未練がましく書いているのは、それから始まる苦難の日々を予感する何かがあったのであろう。

法改正によって、県施工が可能になった流域下水道の促進を主目的に設置された、下水道課の最初の大仕事が、高岡市二上に計画された小矢部川流域下水道処理場用地の取得であった。ところが地元には、既に反対期成同盟会が結成されており、当時全国的に大規模処理場の反対運動を展開していた大学の先生達が支援に来たりして、反対運動は盛り上がっていた。更に議会の一部やマスコミが、あたかも処理場が公害の発生源になるかのように言いたてて、私達を困らせた。そんな状況の中で、私を始め課の皆さんが、どれだけの延人数二上へ説得に出かけたことか。昼となく夜となく、歓迎されない戸別訪問を数かぎりなく続け、その上何回となく大挙して県庁に押しかけてくる反対陳情に忙殺されていたあの頃は、私の県庁生活の中で最も辛く苦しい時期だった。

しかしその間、非力な私を支えてあらゆる努力を惜しまず、言葉に尽くせない程苦勞をして頂いた当時の課の皆さんには、今でも本当に感謝の気持ちで一杯である。

成田空港と同じで、最初にボタンのかけ違いがあったのかもしれない。けれども、所謂迷惑施設を地元を受け入れてもらうには、結局それをカバーするどんな施設、対策が可能かということに、全てはかかっているのではなかろうか。

二上の場合も、長い間探しあぐねていた交渉の糸口は、以外なところからやってきた。当時高岡市にはもう一つ、昭和20年代からの長い懸案事項があった。富山大学工学部の五福移転問題である。この問題が代替として、国立短大を高岡に設置することで決着した時、これを二上に開設することで、処理場も同時に解決の方向に向かったのである。これを機に私も漸く5年間にわたる課長職を離れることが出来た。昭和54年3月である。

それから10年後の平成元年4月6日、既に県庁を退職して第二の人生を歩いていた私のもとに、二上連合自治会長の川崎さんと、土地改良区理事長の早川さんとの連名で招待状が届いた。処理場設置に伴う地元振興対策事業が完成した祝賀会へのお招きである。胸を張って出席

する自信はもとよりなかったが、その後の二上の変わりようを、この目で確かめたいと思い足を運んだ。

あの頃何の施設もない見渡すかぎりの田んぼだった処理場計画地は、見違えるばかりに各種施設で埋め尽くされ、昔の面影は全く無かった。地元の人達は、お世辞ではあろうが口々に私の苦勞をねぎらってくれた。そして、おかげで小矢部川の洪水時にしばしば浸水したような土地が、このように素晴らしく発展したことを、心から喜んでいと話してくれた時、過ぎ去った苦澁の5年間も、少しは役に立ったのだろうか、しみじみ思い返してみたのだった。